

河内大豆づくり情報～中耕培土編～

令和元(2019)7月 河内農業振興事務所

ポイント

- ・中耕培土は開花1週間前までに終わらせましょう！
- ・難防除雑草は中耕培土+茎葉処理剤で防除しましょう！
- ・べと病の防除は開花10日前～子実肥大期に実施しましょう！

1 気象概況と播種状況

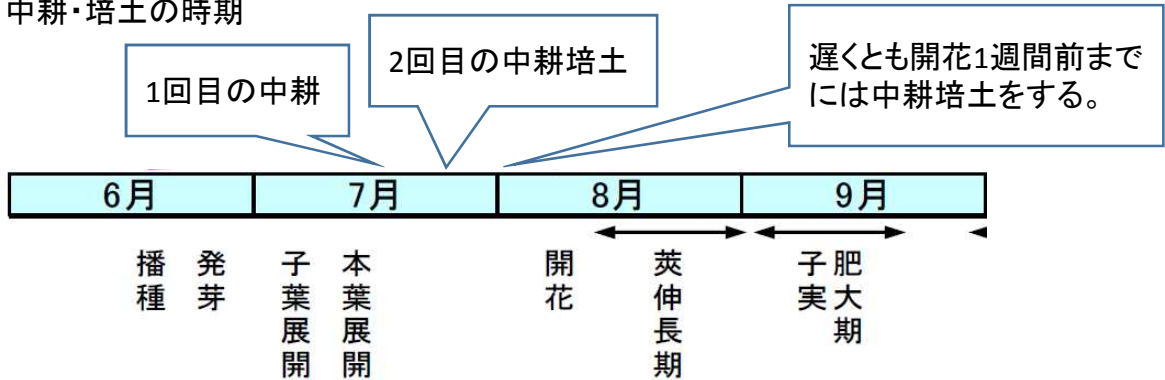
関東甲信地方の梅雨入りは6月7日頃(平年6月8日頃)で、6月の平均気温20.9℃(平年差+0.3℃)、降水量447mm(平年比164%)、日照時間114時間(平年比101%)と多く推移しました。降雨の影響で、播種の遅れや播種後の出芽不良が生じています。

2 中耕・培土

中耕・培土の時期と注意点

中耕は播種後20日頃(複葉1～2枚程度)、2回目の中耕培土は1回目の7～10日後(複葉4～5枚程度)に行いましょう。遅い中耕・培土は断根等により、生育を阻害するので、遅くとも開花1週間前までに終了するように実施しましょう。

図1 中耕・培土の時期



注) 6月中旬播種の場合

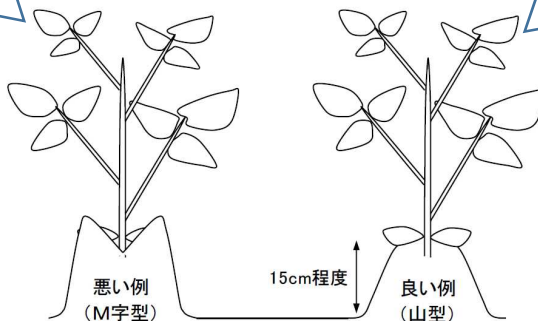
中耕の効果

- ① 畦間の雑草をすき込む
- ② 土壌が膨軟化して通気性の改善

培土の効果

- ① 不定根の発生による、養分吸収の促進
- ② 不定根への根粒着生による、地上部の生育増大
- ③ 不定根発生により、倒伏防止
- ④ 排水性の向上による湿害対策

株元まで土がかからない「M字型」の培土は、不定根発生が期待できないばかりか、凹んだ部分に水がたまり病害発生の原因となる。



・培土した土が茎まで覆う「山型」の培土を行う。
・あまり高い培土は収穫作業を困難とし、汚損粒発生や収穫ロスを増大させる。
・培土の高さは15cm程度とする。

図1 培土における株元への土寄せ方法(農業技術体系作物編 6、技 39)

3 干ばつ対策

大豆は開花前～莢伸長期にかけて水分要求量が最も大きく、土壌の過乾燥が生育に大きく影響します。干ばつを起こしやすい土壌ではかん水を実施しましょう。暗渠が施工してある水田ならば暗渠を開めるだけでも干ばつ防止になります。

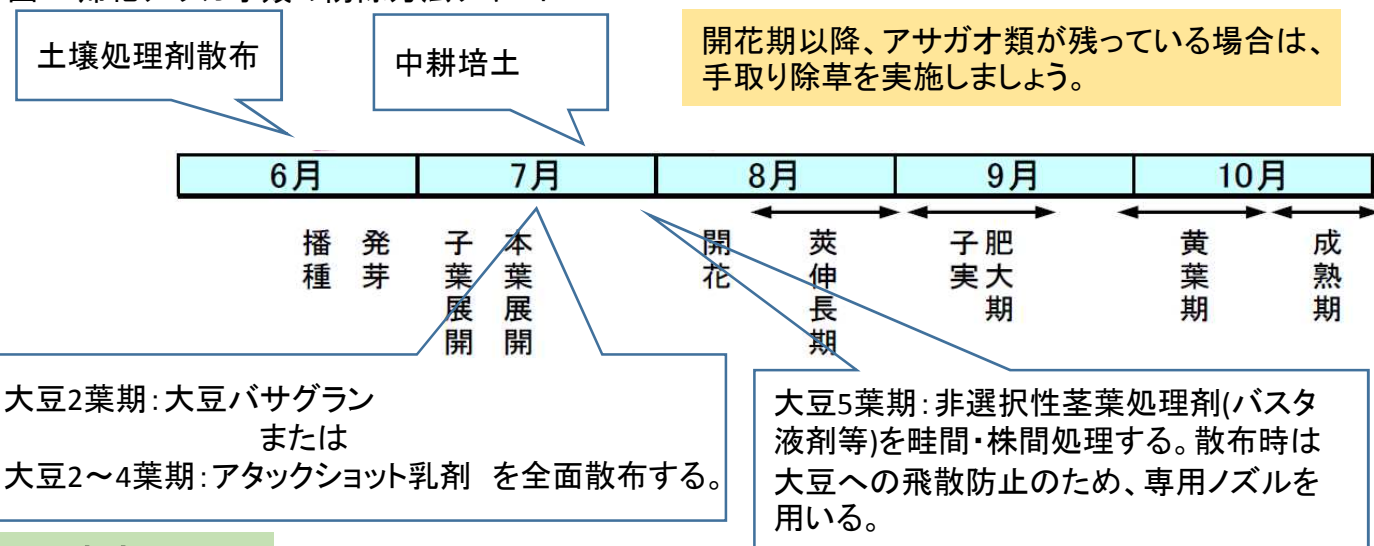
表1 生育ステージごとの乾燥の影響

生育ステージ	乾燥の影響による被害
花芽分化期～開花始期	花数の減少、落花・落莢の増加
開花終期	不稔莢の増加
開花終期以降	百粒重の低下

4 雑草対策

アサガオ類は発生期間が長いものの、その大部分は大豆播種後3週間までに集中します。初期発生のアサガオ類を蔓延させないために、大豆の苗立ち・初期生育の確保が大切です。

図2 帰化アサガオ類の防除方法チャート



5 病虫害防除

べと病

里のほほえみは、「べと病」が発生しやすいので、開花10日前～子実肥大期に薬剤防除を適宜行いましょう。

紫斑病

薬剤散布時期は開花15～35日後とし、1回目の散布はこの期間の早い時期に実施しましょう。

カメムシ類

開花15日後に1回目の薬剤散布を行い、その後10～14日おきに3～5回薬剤散布を実施します。特に多発地域では散布期間を短く、回数を多くしましょう。



写真4 べと病(葉)



写真5 べと病(子実)



写真6 紫斑粒



7月～8月は「農作業中の熱中症による死亡事故」が集中します。

高齢者の事故が多発しています！余裕を持った作業を心がけましょう。